

# 仮想家族　もりもり村

紫 李鳥

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

あるところに、人間と動物が共に暮らす“もりもり村”という、小さな村がありました。

# 目次

仮想家族 もりもり村

—  
1



# 仮想家族 もりもり村

あるところに、人間と動物が共に暮らす、“もりもり村”という、自然が豊かな小さな村がありました。

森や里には四季折々の草花が咲き乱れ、それはそれは美しい村です。

そんな、もりもり村のお話です。

その森の番人は、お仙（せん）という女の人です。

お仙さんは毎日毎日夜なべをして、息子のちゃんちゃんこを縫っていました。

「早く帰って」お……」

お仙さんは独り言を呟きながら、息子の帰る日を今か今かと待ちわびていました。

やがて雪も解け、春がやって来ました。

耳を澄ますと、足音が……。ここで、“春の足音が”と繋げたいところですが、予想外なのです。

ブツシャブツシャブツシャブツシャ……

変な足音です。

ガタガタツ

お仙さんが恐る恐る戸を開けると、そこにいたのは、

「お〜、息子や」

小さな熊でした。お仙さんは子熊を抱きしめました。

「……おつかちゃん、て呼んでもいい？」

「ああ、いいとも。笑ってもいいとも」

「……ハハハ」

「息子、息子。さあさあ、お入り。抱っこしてあげよう」

お仙さんは子熊を抱っこすると、家に入りました。

囲炉裏の鍋からは、湯気が立ち上っています。

「腹が減ってるじゃろ？おまえの好きな鮭が入った鍋じゃ。うまいぞ〜」

「うん、いただきま〜す」

子熊は、うまそうに食べました。

「ムシャムシャ……ん、おいし〜」

「そうかいそうかい、よかったよかった」

お仙さんは嬉しくて、目頭を熱くしました。

お仙さんは、心を込めて縫った青いちちゃんちゃんこを子熊に着せてやりました。

「暖ったかい」

「そうかいそうかい、よかったよかった。よく似合うよ。今日からおまえの名前は熊太郎だ。いいかい？」

「うん、いい」

「おまえの本当のおっかちゃんは、……目が覚めなかった。……ごめんよ、助けてやれんで」

「おっかちゃんのせいじゃないよ。ホントのおっかちゃんが死んだのは、……鉄砲で撃たれたせいだよ。ボク、知ってるもん」

「……知ってたのかい。わしとおまえとは見た目は違うが、おんなじ哺乳類だ。家族だと思っておくれ」

「……おっかちゃん」

「熊太郎……」

お仙さんと熊太郎は、飽きることなく語らいました。（見た目の違いと哺乳類について

て)

翌朝、熊太郎が森へ行くと、たくさんの友達が温かく迎えてくれました。  
兎に猿に狐にリス。

「熊く〜ん、おかえり〜」

みんなが大歓迎です。

「うん。ただいま〜」

みんなは輪になって、青いちゃんちゃんこを着た熊太郎を囲みました。

♪輪になって遊ぼ〜

びよんびよん

きいーきいー

コンコン

スールスル

ねえ、ねえ、ぼくも仲間に入れて〜

小鳥のぴーぴも仲間入り〜



輪になって遊ぼ〜

ぴよんぴよん

きいーきいー

コンコン

スールスル

びーび

輪になって遊ぼ〜

みんなみんな〜

ともだち〜

「みんな〜、おやつの時間ですよ〜」

お仙さんが、バスケットを提げてやって来ました。

「わ〜い、わ〜い」

みんな、大喜びです。

「は〜い、キャラメルですよ。 “おせんにキャラメル” な〜んちやつて」

「……………」

お仙さんのおやじギャグは、みんなには通じなかつたようです。

見た目の違いとジェネレーションギャップを痛感しながらも、お仙さんは、みんなが仲良く、元気でいてくれることが何よりも嬉しかったのです。

「クチャクチャ……おいしく」

みんな、笑顔です。

お仙さんは幸せだと思いました。

実の母親を亡くした熊太郎が、私のことを「おつかちゃん」と呼んでくれたことが、……何よりも一番。

どうか、人間と動物が共に暮らせますように……

そんな願いを込めた、「もりもり村」のお話でした。